2021 度プロジェクト研究所業績報告書(中間報告)

プロジェクト名	観光コミュニケーション研究所
研　究　所　名	実践女子大学観光コミュニケーション研究所
設　置　開　始	2020.4.1
設　置　終　了	2023.3.31

＜研究業績報告書＞

今年度の研究計画の概要
新型コロナウィルスによる行動規制のため、2021 年度の活動もほとんどできない状況にあったが、3 月に 3 日間にわたる現地調査を行うことができた。そこで、撮影した多摩地域の観光対象に関する写真およびビデオを 2022 年度に SNS へアップロードするための準備を行う計画を立てた。以下は、そのための調査日程である。 調査場所：あきる野市およびその周辺 あきる野市山田、あきる野市乙津、あきる野市小中野、あきる野市養沢 日野市多摩平、昭島市拝島町、福生市熊川、八王子市長房町 調査日程：3 月 18 日（金）～20 日（日） 調査人員：研究所員 1 名と留学生 2 名（クロアチアとボスニアヘルツェゴビナ）

今年度の研究実績
以下に示す 3 日間の現地調査を実施し、写真およびビデオ撮影によるデータの分析を行い、2022 年度の前半で世界に発信するための準備を行った。 3 月 18 日（金） ・かごの屋の個室での昼食の撮影（クロアチア語、ボスニア語での解説） ・キッコーゴ醤油の工場見学、土産購入の撮影（クロアチア語、ボスニア語での解説） ・秋川渓谷「瀬音の湯」での夕食、宿泊の撮影（クロアチア語、ボスニア語での解説） 3 月 19 日（土） ・石舟橋の散策風景の撮影（クロアチア語、ボスニア語での解説） ・黒茶屋の個室での昼食の撮影（クロアチア語、ボスニア語での解説） ・大岳鍾乳洞の中での撮影（クロアチア語、ボスニア語での解説） ・フォレストイン昭和館での宿泊の撮影（クロアチア語、ボスニア語での解説） ・昭和の森車屋の弁当の撮影（クロアチア語、ボスニア語での解説） 3 月 20 日（日）

・石川酒造の工場見学、昼食の撮影（クロアチア語、ボスニア語での解説）
・武蔵陵墓地での撮影（クロアチア語、ボスニア語での解説）
上記 3 日間の調査の後に、2022 年度に世界に向けて発信するデータの分析と整備を行った。

現在までの進捗状況
１．事業計画の進捗度について（①～④のいずれかを選択してください） ①順調である　②おおむね順調である　③やや遅れている　④遅れている
新型コロナウィルスの対策のため行動が制限されたことを受け、解決を図るために小回りに活動できる少人数での調査を計画し直した。2022 年度（本研究の最終年度）で研究を完結するため、SNS にて発信するデジタルデータ（写真・ビデオ）を数多く採取し、SNS にて外国語で発信するための準備を行った。
２．目標達成状況について（①～④のいずれかを選択してください） ①　達成した　②おおむね達成した　③十分達成されたとはいえない　④未達成である
2022 年度の前半も引き続きデータ収集に充て、後半よりそのデータを SNS にて世界発信し、その反応を分析する予定でいる。各自治体を招いてシンポジウムを行い、そこで研究成果を発表し出版物を配付し、多摩地域の活性化に資する計画に変更はない。

取り組み状況について
１．組織的な取り組みができているか（①～④のいずれかを選択してください） ①できている　②おおむねできている　③あまりできていない　④できていない
新型コロナウィルスによる社会的な行動が抑制され続けてきたため研究員同士の協同作業は十分に図れていない。当初の研究目的を達成するために計画を再度練り直し、コンパクトな調査方法を展開させながら研究を進めている。
２．研究所メンバーの活動状況について
本研究は東京オリンピック・パラリンピックで来日するオリンピック関係者（報道、スタッフ、他）を対象にインタビューを行い、多摩地域の活性に寄与する情報発信の技法を自治体に提供するというものであったが、計画は根底から覆されたため研究員の役割を再編成した。最終年度の前半での世界発信、後半での研究成果の公表について役割の再編を行った。

成果について
１．波及効果が見込まれる成果が得られているか
多摩地域の活性化に対する効果的な手法の提示を報告書にまとめ、シンポジウムを開催し、そこで研究成果を公表する計画に変わりはない。オリンピック等の関係者に対するインタビューに替わり、留学生のコーディネーターとともに多摩地域の調査および写真・ビデオ撮影による発信情報の分析と選定は順調に進んでおり、シンポジウムを通じて自治体への成果発表に向けて予定通り作業は進められている。本研究が公表された暁には、波及効果が見込まれる成果が期待できる。
２．雑誌、学会発表、図書など
2022 年度（最終年度）の 1 月～3 月に立川のホテルにおいて自治体の関係者を集めてシンポジウムを行い、研究成果をまとめた報告書を配付し、成果発表とする予定に変更はない。